

サリュ
Spiritual

VOL 4 2011 Winter

「次の時代の
若者たちに

日本の特性が活かされた貢献を世界に、と活動しています」。僧侶にして、各種団体の代表。九州大学の教授も務めた。まさに八面六臂の砂田さんと應典院とは「ストップ・ガン・キャラバン隊」による全国シンポジウムの大坂会場になったことご縁に。

1994年8月、ニューヨークにて愛息の敬くん(当時22歳)が射殺。96年11月には警察庁の警察庁薬物銃器対策課の支援も得て、上記のキャラバン隊が発足した。そして99年3月、砂田さんら遺族と被害者が銃器メーカー32社に起こした製造責任集団訴訟は、米国の連邦最高裁で有罪が確定。近年は「薬物に手を染め、銃器に憧れ、最終的には暴力団に流れる少年を如何にして食い止め、救うか、命の尊厳を考える機運を盛り上げる」ことを目標に、啓発事業に取り組んできた。

そして、3.11。砂田さんは「病院船を創ろう!」と呼びかける。平常時には高度医療の、災害発発生時には地域の指揮所としての役割を果たすためだ。「大切にしたいんです。

いのちを喪って
得た教訓を…」

青森・八戸から岩手・陸前高田まで、800km計14か所、被災地を念仏行脚した砂田向壺さん(2011年4月17日)
(写真:岩手県久慈市にて、砂田さん提供)

2011年5月21日、砂田さんが代表を務める公益社団法人ストップガンキャラバン隊が、應典院本堂ホールにて、「未来に種まきリレーシンポジウム」を開催しました。

<http://www.mobilehospital.org>





宗教の 社会貢献を、 問い直す。

「無縁」から「絆」へ。心は、変異したのか。



写真：シンサイミライノハナ
2011年4月10日「Pray from West」
（撮影：柳樂健太）

このたびの震災では、仏教界の支援が「モノやカネ」から飛躍的に「対人」にシフトしました。「心のケアこそ僧侶の本分」との認識が広がり、多くの僧侶たちが現地へ赴きました。それ自体は結構なことですが、刻々変わる被災地の状況もわきまえず、にわか仕込みの知識と技術を、いわば自分の都合で押しつけたような例もあったと聞きます。傾聴ボランティアの中途半端な対応が悲嘆による傷を深くし、相手を自死へ追い込んだケースもあった。「傾聴の二次被害」というそうです。

教団の報告書には、「共生」とか「寄り添い」とか、そんな宗教者好みの言葉が多用されていますが、それらは本当に「利他の実践」であったのか、時間をかけた検証が必要でしょう。

むしろ、日本仏教が、震災から学んだものは大きい。教団のシステム、人材育成、専門能力、外部連携など再考すべき点も多々ありますが、同時に寺と地域の平常時における関係性が変化する可能性も想像に難くありません。

被災地を経験した宗教者たちは、震災後をどう生きるのか。そこには、期待と不安が半ばしています。

「3・11」東日本大震災発生。未曾有の死者・行方不明者を出した歴史的災厄に直面して、「第3の戦後」「歴史的転換点」という言説が飛び交った。メディアは、「絆」や「つながり」を連呼して、「宗教の社会貢献」というテーマも、一気にリアリティを増している。それを「社会化」と見るべきか、あるいは「世俗化」と見るべきか、紙一重だ。震災後の社会を見据え、改めて「宗教の社会貢献」を問う。

共生／共殺の彼方へ

Spiritual
Opinion

宗教は地域に根差した 民衆的霊性とどう出会うか



渡辺 順一
Jun'ichi WATANABE

1956年生まれ。金光教師・支縁のまち羽曳野希望館代表。2003年にsoul in 釜ヶ崎（野宿者問題を考える宗教者連絡会）を発足させ、教団を超えた宗教者ネットワークとして活動を展開。その活動は「貧魂社会ニッポンへ～釜ヶ崎からの発信」（アットワークス、2008年）にまとめられている。

「苦の時代」における「共生社会と宗教」の課題 (3.6から3.11へ)

苦の時代

資本主義のグローバリゼーションは、地球規模で自然環境を破壊し、伝統社会が形成してきた様々な共同体の絆を解体・流動化させながら、貧困の拡大と社会的排除の多様化を世界各地に生み出している。日本社会においても、1990年代後半から大都市部で顕在化した野宿者問題を始め、フリーター、ワーキングプア、ニート、「引きこもり」、ネットカフェ難民などと呼ばれる、若者達の多様な「ホームレス」化、低所得家庭で起きている世代間の貧困連鎖、13年間連続3万人以上の「自死者」達の死と生に示された絶望と孤独の蔓延、生涯独身率の上昇、超高齢化時代における老人の孤立化の問題など、生きづらいつ時代の到来をあらわす問題群は、数え上げればきりがなくらいだ。2010年にNHKが放映したドキュメンタリー番組「無縁社会」や、朝日新聞が同年末から2011年にかけて連載した「孤族の国」の特集は、このような日本社会の状況を浮き彫りにし、人々に大きな衝撃を与えた。このことは、孤独や生活不安を抱えながら生きている多くの人々にとって、行路病死や「自死」「孤独死」が、自分とは無関係な出来事とは感じられなくなってきたことを物語っている。

現代は、地縁・血縁など伝統的な家郷社会の絆が解体され、学校や会社など近代になって編制された様々な共同体が、人々との信頼や友愛の関係によって支えられる縁(えにし)の場としての力を弱めて、有用性による排除や支配の場としての側面を強めている時代である。人や命が「物」化されて、関係性が傷ついていく、このようなスピリチュアルリティ喪失の時代にあつて、宗教は、人々が有用性の論理を超えて、お互いの命を無条件に認め合えるような、「共生」の姿を、どのように実践的に提示し得るのだろうか。

3.6フォーラム

2011年3月6日、同志社大学で「共生社会と宗教を考える

フォーラム」が開催された。

「宗教の社会貢献」を研究する宗教社会学者達、「共生・地域文化大賞」（主催：浄土宗）を受賞した北九州ホームレス支援機構を始めとする、キリスト教、仏教、新宗教の宗教者達が集まり、アカデミズムの研究現場と諸宗教の臨床現場を横断する形で、「共生社会と宗教」をめぐる様々な問題が討議された。この時私は、新宗教の立場で実践報告をしたが、私を含めた臨床現場からの全報告、そして会場からの発言に共通する、こんにちの教団宗教の現状に対する批判的認識は、「信の共同体」の内側に蔓延している、「苦」や「痛み」への共感力・現実感覚の希薄さ、ということであったように思う。キリスト教であれ伝統仏教であれ新宗教であれ、諸教団に蓄積されてきた信仰の教義的な言説は、現代を生きる人々の「苦」や「痛み」と切り結ばれてこそ、救いの言葉としてのリアリティを獲得する。「信の共同体」でしか通用しない言葉の群れは、いかに宗教思想的に深淵に、あるいは普遍主義的に語られようとも、個々の「苦」の現実に対しては、その具体的状況を切り開くことができない、いわばゴム製のナイフにすぎない。切っても、血が流れることがないのだ。伝統的教義についての語りの言葉が、個別性や実践性を帯びない「説明」の言葉に陥ってしまっているという、宗教的言説の形式主義化こそが、「信の共同体」がそれぞれに抱え込んでいる最も深い危機なのではないだろうか。

世俗社会への「出家」

何らかの「縁」に導かれ、人々の現実的苦悩と出会ってしまった宗教者達は、身につけたゴム製のナイフ（「答え」の教義）を棄てて、自分の言葉で、問題の意味を考え始める。人々と語り合い、「苦」や「痛み」と共振してしまった自分の魂に、戸惑いながらも向き合わざるを得なくなる。その過程で、自分では答えきれない「問い」を携えて、開祖達が信仰遺産として残した膨大な言葉の群れ（テキスト群）との対話を開始する。そして、再度また、テクス

トから突きつけられてくる新たな「問い」を抱いて、人々の生活の現場へと出かけていく。3.6フォーラムに集まった宗教者達の多く、例えば「自死」防止やホームレス支援に携わる若い僧侶達は、このような行動パターンを示している。それは、同職集団の社会となった教団から、人々が生きる「スピリチュアルな世俗社会」への、現代的な再「出家」の試み、であるのかも知れない。彼等の、このような社会的彷徨を通じてのテキストの読み行為は、開祖達がそれぞれの時代状況のただ中で紡ぎ出してきた言葉（「問い」の教義）や、それを発する人間開祖の等身大の眼差しに、時代を超えて発見的に出会っていかうとする、教学的な知の営みであるように思える。

共殺／共滅のリスク社会

3.6フォーラムから一週間後、東日本大震災が発生した。同フォーラムに参加した多くの宗教者、研究者、ジャーナリスト達は、被災地に駆けつけ、そのあまりにも激しい惨禍の前に言葉を失いながらも、被災者救援・支援のあり方を、それぞれの立場で模索し始めた。直ぐには現地に行けなかった者もいる。行けなかった者達は、後方から様々な形で、膨大な死者達の無念の思いや、生き残った者達の「苦」や「痛み」と繋がろうとした。

考えてみれば、2011年は、「危機の時代」の一つの終わり新たな始まりを暗示するような、歴史的な節目の年である。すなわち、辛亥革命から100年、満州事変から80年、日米開戦から70年、サンフランシスコ講和から60年、湾岸戦争・ソ連崩壊から20年、そして9.11同時多発テロから10年、に当たる。戦争やクーデターやテロリズムによって、社会体制が変えられていったとしても、人類にとって近代という時代は、常に共殺/共滅のリスクを抱えながら歩んできた、「危機の時代」であり続け

てきた。「無縁社会」と呼ばれるこんにちの状況は、繋がりを喪失した人々の、破滅や転落への不安を写し出すものであるが、その個別的な不安や孤立感、共殺/共滅のリスク社会の上に共に成り立っている。それ故に、不安や「生きづらさ」を共に分かち合うことは、誰にとっても可能なのだ。しかし、実際にはそうなっていない。震災後繰り返されるようになった、「日本人の絆」・「一つのニッポン」の強調や、「強い政治」・「変革」への過度の期待は、避けられないリスクを真正面から見つめて、共に生き得る道を模索することではなく、第三者に対する支配や排除を生み出し、新たな「危機」の始まりを準備するものでしかないように思う。

地域に根差す民衆的靈性

そして、大震災・津波による甚大な被害と、福島原発の事故は、「共生社会」の実現という課題が、人間社会の関係性の問題だけではない、ということ突きつけた。大自然と共に生きることが、人類にとっていかに厳しく、真剣な課題であり続けてきたことか。大地の揺らぎや大津波、干ばつやひでりという、地球生命の圧倒的な暴力の前に、人類はいかに無力であるのか。津波の到達地点に建立された神社や祠、村を津波から守り続けてきた巨木への信仰、虎舞い・獅子舞などの民俗芸能・祭りに表された、東北地方に伝わる「宗教以前」の民俗的知は、大自然に宿る神々から許されて生かされているという、人類の生存の姿を、未来へ向けて伝承するものである。人類は、神々の森を切り開き、神々の大地に鋤を入れ、神々の領土に家を建て、その「罪」や「無礼」を許されつつ生きてきた。民俗的知の形で地域に伝承されてきた民衆的靈性は、そのような人類の「罪」や無力さに対して自覚的であるからこそ、謙虚であり、物静かに言葉を発する。

初盆を迎える頃、津波が襲ったまことに、仮設の仏具店を見た。物静かな風景、そこに鎮魂の願いが見えとれる。

(写真：岩手県大槌町にて・2011年8月18日／撮影：山口洋典)

無明の光を共に生きる (3.6から3.11へ)

東北地方の「苦」と 宮沢賢治の生命論の時代

大自然に宿る神々・精霊達の言葉を聞き取りながら、人々の「苦」の現実と向き合い、共殺の関係世界に投げ込まれた人間存在の救いの在処を、「生命」の本性的問題として考え通した人物がいる。1933年(昭和8)に37歳で亡くなった、宮沢賢治である。賢治の作品には、岩手県三陸海岸を襲った大地震・津波や冷害などの自然災害、不況・凶作による農村疲弊と貧困・飢餓、戦争への応召など、東北地方農民達の「苦」や「痛み」への問題意識が、一貫して流れているように思える。賢治が生まれた1896年(明治29)には、2万人以上の死者を出した明治三陸地震・大津波が、また賢治が亡くなる年には、やはり甚大な被害をもたらした昭和三陸地震・大津波が発生している。明治三陸大津波による被害の伝承が、賢治の作品群にどのような影響を及ぼしたのかは、分からない。ただ、『銀河鉄道の夜』の、ザネリを救う為に溺れ死んだカムパネルラ、他の人々を押し退けてボートに乗るよりも沈む船に残った家庭教師と教え子達、あるいは『貝の火』の、川で溺れるひばりの子を助けた子兎のホモイなど、水難による死や自己犠牲のエピソードは、重要な場面で度々描かれている。溺れ死んだ者達の魂は、何処へ行くのか？生き残された者達は、死者達との決別を納得し、ジョバンニのように、「ほんとうのさいわい」を探す旅をこの世で続けていくことが、どのように出来るのか？

宮沢賢治の、「たべもの」へのこだわりや、食物連鎖という共殺/共生の煉獄を見つめた「修羅」意識については、これまで数多く論じられてきた。賢治によれば、生きることは、他の生命を殺して、その死体を自らの生命に採り入れて生き延びることに他ならない。しかも、共殺関係にあるそれぞれの生命は、それぞれが生存へのエゴイズムを持った、かけがえのないたった一人の「私」の生命である。その個々の生命の生存エゴイズムを否定すれば、ファッショ的な共生思想(生命の全体主義)か、自死の思想となる。

ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫を食べないで飢えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行ってしまう。

(『よだかの星』)

共殺/共生のカルマから脱出して、星になって燃えるよだかの自己愛は、しかし何の解決も救いももたらしてはいない。星に昇華するくらいなら、何故鷹に食べられてやらなかったのか、と思う。よだかの焼身は、裏返された生存エゴイズムにすぎない。

それでは、善行や自己犠牲の行為は、「ほんとうのさいわい」に繋がるものなのだろうか？ 友達を救って死んだカムパネルラは、残された母親の悲しみを思って、その行為が良いものであるのか分からない、と言っている。

ホモイの受難

「貝の火」と呼ばれる「宝珠」は、共殺/共生の世界を生きる動物達の間で有名な宝物であるが、それを一生持ち続けることは至難の業だ、とされている。子兎のホモイがそれを鳥の王から授けられたのは、川辺で遊んでいた時に、川に流されたひばりの子を見つけ、思わず飛び込んで命がけて助けたからだ。その噂は瞬間に広がり、次の日から様々な誘惑がホモイを襲うようになる。無邪気であったホモイの心に、驕慢や打算や悪意が忍び込む。そして僅か6日後、「貝の火」は砕け散り、その粉が入ったホモイの目は白く濁ってしまい、何も物が見えなくなった。しかし、ホモイの父親は、泣きじゃくる息子の背中を静かに叩いて、次のように語りかけているのである。

泣くな。こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかったお前は、一番さいわひなのだ。目はきつと又よくなる。お父さんがよくてやるから。な。泣くな。

(『貝の火』)

ホモイの善行は、何の計らいもなく「苦」や「痛み」の状況に思わず飛び込んだ、「捨身」の行為である。子兎にすぎないホモイには、共殺/共生のエゴイズムが絡み合う煉獄世界に救いをもたらすような、修羅/菩薩の力はない。ホモイに寄り添い続けてきた父親は、そのことをよく知っていたのだ。そして、その煉獄を他者と共に生きることは、自らが無力であること、卑怯であること、無知であることを、しっかり自覚することからしか始まらない、ということを知っていた。ホモイにとって「貝の火」の喪失は、無明を生きることの始まりを意味した。しかし、その歩みは、闇の中を独り彷徨うことではなく、「罪や、かなしみでさへ、そこでは聖(きよ)くきれいにかがやいてゐる」ことを可能にするような、無明を包む大きな光の中で、寄り添い、支え合いながら、「ほんとうのさいわい」を求めて生きる営みである。

宮沢賢治は、「ほんとうのたべもの」である「ものがたり」を、林や野原からもらった、という。そしてその森の精霊達の言葉は、共殺/共生を自覚的に生きている、魚を捕る漁民達や、『なめとこ山の熊』の小十郎のようなマタギ達の、民衆的靈性を代弁するものでもあったように思う。



「共生社会と宗教」(於:同志社大学)

3月6日のフォーラムでは会場にて共通のキーワード(ハッシュタグ:#tomoikidish)がつけられて内容が伝えられていました。本欄では、その内容を再構成して抄録とします。なお、文責は編集部にあります。

第一部「基調講演」:櫻井義秀先生(北海道大学)
 第二部「事例報告」
 ・森松長生さん(北九州ホームレス支援機構)
 ・吉水岳彦さん(社会慈善委員会「ひとさじの会」)
 ・渡辺順一さん(野宿者問題を考える宗教者連絡会表)

第三部「パネルディスカッション」
 ・深尾昌峰さん(龍谷大学) / 小原克博さん(同志社大学) / 稲場圭信さん(大阪大学)

from twitter
 應典院のツイッター
<http://twitter.com/outenin>

【櫻井】昨年はNHKで「無縁社会」、朝日新聞で「孤族を越えて」などの報道が相次いだ。しかし本当につながりは失われてきたのか?ただ、実感がない、気づけなくなってきたのでは?▼浄土真宗の吉本伊信の内観など、自己を見つめることで、社会とのつながりを見いだす、気づく取り組みは世界的にも注目を集めた。今日はアンケート調査・統計、タイの事例からEngaged Religionに迫る。▼タイのPhraahampit寺院ではHIV/AIDS罹患者が福田となつて功德を積む。多くの差別の中を生きる上で居場所の確保と死後の安寧が得られるため。そこに来世への期待を込めて在家の布施者が支える。▼今回取り上げたタイの実践は、世俗を超える宗教の実践。しかし、社会活動ではなく社会貢献として捉えていきたい。それは活動の受け手側が主体であり、評価者となつているため。そして、社会的必要性から始めている。

【森松】北九州では「ウズレス」と「ホームレス」の双方に支援している。これは、単に住処について支援するだけでなく、孤立状態からの回復のために、誰かが家族になることにも取り組んでいかねばならない、ということ。▼沖縄出身で、米軍基地問題の中で生きてきた。特に少女暴行事件はキリスト者の自分としてはキリスト教への問いを重ねてきた。今、ホームレス支援活動に専従するために、神への服従と教会を守ることを断念することに。▼ホー

ムレス支援では「切らない、追い出さない。勝手にしろ」と言わない。大事だと言いつける。自分の言葉ではなく使命として。絆というのは「あのとき探したんだよ」と言えること。▼「何かをしなかつたら支援する」と「支援するから何かをするな」は異なる。我々は後者。イエスの全てを許した上で、戒めがあるという考えから。ただし、それらはNPO法人の活動では前に出さない。内に秘めて。▼支援にはガードレール型とセーフティーネット型がある。前者は「落ちたら終わり」後者は「落ちて助かる」。失敗しても助かるようにするには大変。しかし、絆づくりをしながら、伴走者のコーディネートに取り組む。

【吉水】社会困窮状態の方の葬送支援、炊き出し、夜回り配食、寺院による米支援などに取り組んでいる。▼東京の山野で生まれ育つた。自分が明日、どうなるかわからないと感じている方々が多いことを知っていた。私にとっての共生は、念仏を通じて仏様と共に生きるということ。他者を救いきれる程、きれいな自分ではない。▼路上生活者の支援活動で、おまえら次いつ来るんだ」と言われた。「月曜日に来ます」と言うと、60個のドーナツを用意いただき、お布施を頂戴した。とはいえ、寄り添いたいという思い先行で活動しているのが私たち。

【渡辺】「貧魂」社会の「支縁」のまちネットワークづくりを展開中…。▼何らかの活動で宗教者のネ

ットワーク化を、と呼びかけると、「忙しい」という声が返ってくる。が多い。何が忙しいのかとつきつめていくと、同じ教団内の人間関係の調整が大変なようだ。宴会なども外せないよう。▼炊き出しに行くのと、一杯のために朝から並んでいる人たちがいる。場合によっては自分の目の前で炊き出しが終わってしまう人がいる。先にいただいた支援者の側が食べ残したとき、胸が痛む。豊かさの中で学びがある。▼炊き出しなどの社会活動を、自らの拠点である金光教の教会にどのようにつなげていけるか、自分が戻れるかを考えて、大阪希望館活動を開始。ネットカフェ難民の若者などがホームレス予備軍として顕在化してきたため。

【深尾】「共生・地域文化大賞」に設立以来携わってきた。当初から驚いたのは浄土宗が主催でない方がよい」と仰つたこと。政教分離の原則に遠慮、萎縮をして、相当の自己規制をしているな、と感じた。▼宗教と社会の接点には、ある固有のイメージで捉えられた。しかし超少子高齢化の時代、経験したことのない社会を迎える。自殺、貧困の問題に、公共・公益の考えを貫く宗教の存在が必要だろう。▼一方で社会活動に取り組む宗教者は「スーパースター」や「余裕がある人たち」と捉えられてきた。これはNPOの現場へまなざしとも重なる気がする。お布施・寄付による「共生経済」の視点も。▼「ソーシャル・エンタープライズ」と呼ばれる、多くの人が

社会的に包摂されていく社会づくりににおいて、日本に7万7千あるお寺を、単に場所としての地域資源だけにとどめていいのか考えたい。▼今、公領域の再構築の上で、我々を取り巻く全体のあり方が問われる中、お寺のNPO化という話もあるが、それでいいのか。日本のNPOは非営利性が強調されすぎた。協同性の議論を根付かせない。

【小原】今回はキリスト教と利他的実践について理論的な観点について取り上げていきたい。そこには律法の最重要事項としての「隣人愛」がある。「隣人を自分のように愛しなさい」というもの。そこでは「個が中心」とされる。▼森松さんが紹介された、ルカの福音書15:1-7の「見失つた羊」のたとえも、今は「原液」を薄めに薄めている。徹底した利他性を帯びた教えは、既存秩序に対し脅威となるため。だから教えを説くさじ加減が難しい。▼キリスト者に対して大事なのは信仰であり、社会に距離を置く人たちもいるが、米国のエヴァンジェリカと呼ばれる人々など、変化も見られる。価値観の違う人々と共生していくために、隣人の再定義がなされつつある。▼利他的実践ということばにはポジティブな響きがあるが、ネガティブな面として、自己犠牲の両義性という側面がある。利他的な個人の集合体が、極めて反利他的な、要は自己中心的な国家をつくることもあるということ。▼宗教が

は、利他も共生も、両義性や功罪があるということ。集団のために、例えば国家や地域など、共同体への犠牲が正当化されるということ。このことは、最早、歴史が教えてくれている。▼エジプトで草の根の信頼を得ながら民主化闘争の一部を担った「ムスリム同胞団」は宗教による社会変革を行った二つの動き。日本と同じことはできないが、資本主義の仕組み自体を相対化する展望を、宗教が提示できないか。

【稲場】今日のテーマは「無自覚の宗教性」と利他主義」とした。現代社会は流動性、利他性、匿名性を帯びている。対人関係は道具によって個人化され、結果として無縁社会となった。また評価ばかりが進んでいく人間関係は希薄に。▼NHK新書から「思いやり格差社会」を2006年に出版したが、経済的な格差よりも人々の思いやりの度合いに格差が生じている社会。英米では教会とボランティア活動などの利他的行為のあいだに明らかな相関がある。▼日本では「無自覚の宗教性」がないか?それは、無自覚に、漠然と抱く、自己を超えたものとのつながりの感覚と、先祖、神仏、世間に対して持つおかげ様の念。そこに個人を強調する「新自由主義ボランティアズム」が、一緒にすること、寄り添うこと、場の意味、それらを議論した一日だった。社会の閉塞感で希望が持てない人たちが、世の中からフェードアウトしつつあるように思う。希望は与えてくれるものではない。ロールモデルが必要。

book guide

フリーライター 田中市三の

仏書探訪

慈悲の怒り

―震災後を生きる心のマネジメント―

90年代に入り、多くの人が「何かがおかしい。…何かが狂ってしまったのではないか」「日本型システムの前壊」と感じ出した。社会の「意図」するものとの目的を「効率化合理化する生き方」は「人の使い捨て」「個人の自発性と疎外」にのみ費やされた。そこには「すでに国策がこう進んでいるのだから」「私にやれることは何もない」との認識による「場の論理」が絶対視され、その「空気にNOを突きつける勇気も出ない。それが「愛の不足」「個の疎外」を培養した。何か事が起これば「忍耐」「がんばろう」「スローガン」で問題を先送りし続ける。これは日本人の「得意分野」。この仕組が東日本大震災にも現われた。だから著者は怒る。今こそ最も「不得意分野」、ダライ・ラマも「有益」と認めた「慈悲の怒りに目覚めよう」。

悲しむ力

―2000人の死を見よ、きた僧侶の30の言葉―

「諸法無我」。万物諸々の因縁によって生くる故人の間に「無縁」はない。本書の行間にそんなメッセージが読み取れる。「ホスピスや在宅介護、自殺と貧困、孤立死の現場で500人以上の方を看取り、2000人の方の葬儀を行った著者も「自分の弱さを正面から見つめることができない時期があった。幼児より母に疎んじられ、叔父の縊死に遭い、養育者祖父母の死に涙もこぼれなかった。自殺、うつ、多重債務、介護疲れ、離婚、病氣、孤独死、孤死…。これら四苦八苦の海に漂流する多くの人々と出遭い、気づいたのが「悲しむ力」の偉大さ。被災地に向いいた著者は、天災人災に打ちひしがれる人々に接し、社会の底辺で苦しむ姿とは違うものを感じた。そこに見たのは「人の悲しみを自分の悲しみと感じる」センスだったが…。

上田 紀行 著
 ●朝日新聞出版(1,000円+税)



中下 大樹 著
 ●朝日新聞(1,050円+税)



磯村 健太郎 著
 ●岩波書店(1,900円+税)

―貧困・自殺に挑む―

ネットで集まった「指導者なき」ウォール街規模デモは「政治経済による貧困」の是正を訴え、やがて日本にも波及するという。さて本書では、その貧困・自殺問題に仏教徒はいまどうあるべきかをルポ形式で問い、その実態に迫る。本書には「宗派を超えた」12人の僧侶たちが登場。僧侶たちの多くは自らも苦悩を抱えつつ、他の魂たちに寄り添い、見守り悲しむ菩薩なのだ。ひたすら「傾聴」する僧侶眞壁太隆さん、路上生活をしたことで相手の「目の高さで触れ合える川浪剛さん、「死にたい」は強く「生きたい」のメッセージを受け止め、自殺を防ごうと務める藤澤克己さん。勝ち組負け組の飾にかかつて社会の底辺で苦悩する人々が直面する貧困・自殺の前には「一切の生きとし生けるものは幸いなれ」の叡智と慈愛があるまじ。

阿満 利磨 著
 ●筑摩書房(ちくま文庫)(1,000円+税)

―法然・親鸞の教えを受けつぐ―

東日本大震災が発生した。その天災人災、とりわけ人災面にどう対処すべきか。著者は「危機になればなるほど露わとなってくる人間のえげつなさ」が、救われようのない絶望感、無力感を生み出してやりきれない思いばかりが深まると嘆く。この「絶望と無力感に至る病」が原因を隠蔽し、事をうやむやに終わらせようとする。環境保護運動に取り組むアメリカ人社会学者「メイシは、エコ・セルフへの大転換を求め。著者はそれを受け、仏教の先人たちが法然親鸞を主軸に清沢満之、高木顕明、今村惠猛、京極逸蔵等の偉大な智慧と慈悲で「行動する仏教」に徹する三つの提案を示す。社会苦を除くエンゲイジド・アクティビズム運動の継承と発展、国策による悪の是正に「直接民主主義」の導入、「政治の極にある宗教を見定めること。かくて、善悪の差別を超えた凡夫の行動へ。

お寺MEETING vol.2

なぜ宗教者がホームレス支援なのか

信仰と社会の狭間で

取材・文 杉本恭子

應典院には、宗教者によるムーブメントが風のように通り抜けていく——『お寺MEETING』は、そのプロセスを“静止画”にして捉えなおす場として2010年にスタートした。第2回のテーマは「なぜ宗教者がホームレス支援なのか」。秋田光彦住職による進行のもと、東京・浅草で路上生活を支援する『社会慈業委員会・ひとさじの会』事務局長吉水岳彦さん、天理大学・おやさと研究所の金子昭先生の対談が行われた。



写真：吉水岳彦さん（ひとさじの会）提供

社会活動をする宗教者はなぜ“教え”を語らない？

「なんでお坊さんは、社会活動をしているときに自分の教義を語らないんですかねえ?」。大阪・釜ヶ崎でホームレス支援活動に関わっていたとき、共に活動していた人がなにげなく口にした問いに、秋田住職はショックを受けたという。

ホームレス支援、あるいはターミナルケアや自死対策に関わる人たちが向き合うのは命の問題である。その現場では、宗教者たちは自らが信仰する宗教の教義を語らず一市民として活動に加わることが多い。しかし、その一方で現場を見渡せばNPOを立ち上げて社会活動に取り組む市民たちが、ある種の宗教性を帯びていく場面がみられる。宗教者のNPO化とNPOの宗教化——“まるでお坊さんのような”NPO活動に加わる市民と、“職業”としてお坊さんをしている人の差異はどこにあるのか。そして、社会活動の現場でなぜ僧侶たちは“布教”をしないのか? 『お寺MEETING vol.2』は、秋田住職が自らに向けてきた“問い”を参加者と共有することから始まった。

また、ゲストに対しては、「活動内容の紹介よりも、その活動を通して宗教者として“どんな変容があったのか”を一人称で思い切り語ってほしい」と秋田住職からリクエストがあった。宗教者の社会活動と信心・信仰の関

わりに踏み込む議論への期待が高まるなか、まずは吉水岳彦さんが語り始めた。

「路上生活者にお墓を」葬送支援をきっかけに

「路上生活をしている人、あるいはその後アパート暮らしをしているが身寄りのない人のお墓がほしい」。吉水さんが現在の活動を始めたのは、「路上生活してきた人のお墓を作りたい」と相談を受けたことがきっかけだった。引き受けるかどうかを決める前に、「まずは路上生活者の現状を知らなければ」と考えた吉水さんは、ホームレス支援活動に参加することにした。つまり、宗教者として関わりを求められたことがきっかけとなり、そのニーズを確認するために現場に入ったのである。

日雇い仕事の途絶える年末年始、ドヤ(簡易宿泊所)に泊まるお金のない路上生活者は、厳寒の戸外に横たわり命を落とすことも少なくない。彼らの様子を見回りし、炊き出し活動をする“越冬支援”に参加した吉水さんは、「何も知らない世界に放り込まれた」のを感じ、「もっと知らなければ」という思いに駆られた。そして毎週のように現場に足を運んで、路上生活者たちの声に耳を傾けるうちに、「絶対に墓を作ろう」という決意が芽生えてきたという。

路上生活者たちは、「一度はあらゆる縁を絶とうとした身の上だから、死ねば無縁仏になるんだ」と誰もが口にする。でも、それは強がり、心の底には「誰かとつながっていたい。手を合わせてもらいたい」という願いが消えない。彼らに「あの世でも仲間とつながれるシンボルとしてのお墓がほしいんです」と請われ、吉水さんは強い衝撃を受けた。

日ごろから、浄土宗僧侶として「今日明日死ぬかもしれないわが身ではあるが、念仏すれば必ず阿弥陀仏がお浄土に連れていってくれる」と信じ、また説いてもきた。しかし、それを切望する人に出会ったのは初めてだったのである。路上生活者、彼らを支援するNPO3団体の思いを僧侶としてまっすぐに受け止め、吉水さんは現住職の了解を得て、自坊境内に『結の墓』を建てた。開眼法要に集まった人たちは涙ながらに念仏をととなえ、以来毎年のように吉水さんをお盆の法要に招

宗教者の社会活動に教義はどう根ざすのか? また、NPOの実践と信仰による実践とはどう位置づけるのか?



應典院 秋田光彦住職

浄土宗・大蓮寺住職・應典院代表。1955年大阪府生まれ。明治大学文学部演劇学科卒業。情報誌『びあ』、映画プロデューサーを経て30代で加行。浄土宗教師として『教化情報センター21の会』事務局長として、数々の宗教イベント・メディアのプロデュースを手がける。97年、大蓮寺塔頭・應典院を、NPOを若いアーティストの拠点として再建。著書に『葬式をしない寺—大阪・應典院の挑戦』(新潮新書)。近著に『釈迦宗との共著で「仏教シネマ〜お坊さんが読み説く映画の中の生老病死」(サンガ)』。

お腹がすいてはお念佛も出てこない。「教え諭す」のでも「救おう」でもなく、他者のかかわりによる自己完成へ。



ひとさじの会 吉水 岳彦さん

1978年東京生まれ。大正大学仏教学部浄土学コース卒業。同大学大学院仏教学研究科仏教学専攻浄土学博士後期課程単位取得修了、博士(仏教学)。現在は光照院にて副住職および淑徳大学非常勤講師の肩書きを持つ。大学時代から子どもに関わる仕事を志し、全国仏教青年協議会の講座や研究会に参加していたが、ホームレス状況にある人や身寄りのない人の共同墓『結の墓』プロジェクトへの関わりから、ホームレス支援を行うことに。現在は、浅草エリアの路上生活者に月2回おにぎり配る活動などをする「ひとさじの会」事務局長として活躍。

現場の実践、教団の伝統、宗教者の人格が活動の力強さを生む。超宗派や超宗教等の体制を求めるのは、活動を受ける側の発想?



天理大学 金子 昭さん

天理大学おやさと研究所教授。1961年、奈良県天理市生まれ。1989年、慶応義塾大学大学院博士課程修了。哲学博士。1995年、和辻賞(日本倫理学会賞)受賞。2005~2007年、台湾の中国文化大学日文系客員教授。倫理学、宗教人間学の諸分野を中心に研究している。主著『シュヴァイツァーその倫理的神秘主義の構造と展開(1995)』『天理人間学総説(1999)』『驚異の仏教ボランティア—台湾の社会参画仏教・慈濟会(2005)』など。

いているそうだ。

路上生活者との関わりのなかで、吉水さんは「教わることのほうが多い」と話す。「苦とは何か」を肌で感じ、つらいことが多くあるなかで生きているからこそ「厭離穢土 欣求浄土」という言葉があるということを実感しながら、そこで教えを説く僧侶としての自分を確かめる。吉水さんの活動から、この世の「苦」と向き合いながら教義を肉付けし学びとっていく、ひとりのお坊さんの姿が浮かびあがってくる。

自らの棘を知らない “あざみの花”として

「あざみ草 己の棘を知らずして 花と思ひて 今日今まで」——吉水さんは、この歌を引用しながら「あざみのように棘があり知らずに人を傷つけてしまう自分」が「お坊さんでござい」という顔をして何ができるのか、と厳しく自らを問う。現場に出れば「何もできない」「どうしようもならない」と気づかされ、心を静めて阿弥陀仏の前で念仏をし、また路上生活者のもとへと足を運ぶ。今は、その往還が支援活動を続けるひとつのサイクルになっている。

お話の最後に、秋田住職から投げかけられた「吉水さんにとっての教化とは？」という問いに、吉水さんは「教えに基づいて何かをさせてもらうことで学び、関わった人に何かを感じ取ってもらうことがひとつの教化と言えるのではないのでしょうか」とわかりやすく応えておられた。仏教の「教化」とは、一方的に何かを教え込むのではなく、「何もできない」凡

夫であるという強い自覚のもと、「上求菩提 下化衆生（他者との関わりによる自己完成）」を実践することではないか。この考え方は、吉水さん自身の活動の根本でもあると言えるそうだ。

現場で発揮される 伝統仏教の強みとは

金子昭先生は、天理教を信仰する宗教者であるとともに大学で教鞭をとる研究者でもある。宗教者と研究者というふたつの視点を巧みにバランスをとりながら、吉水さんのお話を引き継ぐかたちで宗教者の社会貢献について語られた。

まず、吉水さんのお話について「非常に力強い僧侶の法話を聴かせていただいた」とコメントし、その「力強さ」の理由を3点に整理された。1点目は、体験者ならではの説得力。2点目は、「やんわりとした語り口」で説くことができる、伝統仏教ならではの強みがあること。たとえば、仏教においては「縁」などの仏教語が日常語として定着しているため、聴く側に違和感を与えずに教えを説くことができるが、新宗教の場合は教義の言葉と日常語のちょっとした断絶が伝えることを難しくするという。そして、3点目は吉水さん自身の人格からにじみ出す宗教性が感じられることである。「生身の人間の言葉であると同時に、宗教のなかから語られている」とことが吉水さんの言葉の持つ「力強さ」ではないかと分析。吉水さんが「浄土」を説けるのは、彼自身の心が「浄土とつながっているからこそ」だと考察を深められた。



吉水さんの出発点となった『結の墓』は、まさしく浄土とはかけはなれた路上生活を浄土に接続する装置ともいえる。吉水さんの経験から見えるのは、浄土での幸せとこの世の幸せを関係づけるところに社会貢献の場を拓く、宗教者の姿ではないだろうか。金子先生は、そこに「宗教者ならではの社会貢献」の在り方を見る。

社会貢献したいという思いを持つのは、宗教者であろうとなかろうと同じである。ただ、宗教者であれば、その心に拠りどころとして人間を超えた存在（天理教であれば「おやがみ」、浄土宗であれば「阿弥陀仏」）を持っている。そして、「人間同士の助け合い」としての行動に、「神仏による救い」への祈りを重ね合わせながら社会活動に関わることになる。

人間としての助け合いですべてを解決できるなら宗教は必要とされない。しかし、病気や死に際してこの世の理では説明しきれない状況に直面するとき、宗教の言葉が求められることがある。その場面にまで向き合う覚悟を持って臨むのが、宗教者としての社会活動ではないか——金子先生はこう結んで、秋田住職のはじまりの問いに答えておられた。

超宗派で社会活動に 取り組む考え方

金子先生は、現在、超宗派・超宗教のNPOを立ち上げて活動をスタートしている。そこで、あえて一宗で活動する『ひとさじの会』に

対して「どこで切り結ぶことができるのだろうか」と問いが投げかけられた。吉水さんが用意したレジュメに「わたしは『超宗派』『社会貢献』という言葉に迷い、自らが『宗』とするものを等閑に付してしまうことは宗教者として不自然なことだと思います」という一文があったからだ。

吉水さんは、「『宗』とは、心から尊び信じ、生きるなかで主となる教え」であるはずなのに、「それをわざわざにしては何の宗教なのだろうか？」と疑問があるという。実際に、『ひとさじの会』には、仏教各宗派や他の宗教の人も参加している。他宗派・他宗教を排除するのはもってのほかだが、「なんとなく教義をまぜこぜ」にしたり、「社会貢献に際して教義を出してはいけない」というやり方にも顔きかねると述べられていた。

吉水さんは、社会活動の現場においてことさらに教義の言葉を語ることはしない。しかしそれは、「自らの宗とするものがあるからこそ横に置いておける」のである。そのことと「宗とするものは活動に不要」という乱暴な議論は切り分けるべきだという思いから、あえてレジュメに明記したのだそうだ。

これに対し、金子先生はご自身があえて超宗教というかたちで活動することは、「受ける側の発想」であると説明。「天理教の活動です」と言う「布教ではないか」警戒されることもある。新宗教による社会活動の難しさに触れられた。また、異なる宗教を持つ人同士の社会活動であっても、人として宗教者として共通して体験する部分があり、そこで触れ合うなかで自らの信仰を深める契機にもなると感じているという。

日本では、お寺や仏教が宗教性をやわら

かく包み込んで、ゆるやかに地域社会の暮らしになじんでいる。ことに、東京の下町にある吉水さんのお寺は、ごく当たり前町内会と関わりを持ち地域行事も行われているそうだ。“社会貢献”というまでもない自然さで、地域とお寺の協働が成立することもまた、伝統仏教の強みである。

社会貢献を通して 個人を語る僧侶たち

質疑応答の時間は、参加者の質問や感想から議論が発展した。印象深かったのは、「宗教者は社会活動に参加することで、宗教的な人格を磨かれていくのではないか」という議論である。宗教者が社会のなかで人と関わり、一人ひとりの人間の苦しみに向かい合うなかで試されるのは“人間力”にほかならない。金子先生は「歴史が長く日本の暮らしに溶け込んでいる伝統仏教はうらやましい」とコメントされたが、“貧病争”の苦しみを抱える個人と向き合ってきた新宗教の宗教者たちは、そのはじまりから悩み苦しむ人に向き合うことが必要とされてきた。この点について、伝統仏教の僧侶たちはどうなのだろうか？むしろ、吉水さんのようにお寺の外に出て社会に飛びこみ、人の苦しみに出遭うなかで、“人間力”を磨きながら宗教的な人格を高めていると言えるかもしれない。

最後に、秋田住職は、阪神淡路大震災でのボランティア経験を振り返り、「あの震災は、社会と仏教の関係を捉え返す出発点であった」と話された。それからの16年間、教団内部には大きな変化は見られていないが、個々

の僧侶たちの在り方は変わりつつあるようだ。若い僧侶のなかには、教団組織内に個人を埋没させずに、自らの言葉で教えを語りはじめの人がいる。そして、彼らが自らを語る場として社会活動に飛び込むことで、「社会貢献する宗教」の新しいうねりが生まれてきているのだ。

社会貢献の場で格闘する若い僧侶たちを見つめる秋田住職の視線はあたたかく、若い彼らをどのように支え育てていくのかを思いやる気持ちにあふれている。



杉本恭子／すぎもと きょうこ
1972年大阪府生。同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。同大学院文学研究科新聞学専攻修士課程修了。ネットコミュニティ運営・ウェブサイト編集等を経て、京都をベースに取材・執筆を行うライターに。現在『彼岸寺』ウェブサイトにて「坊主めくり—現代名僧図鑑」と題したインタビューを連載中。
<http://higan.net/blog/bouzu/>

市民活動と宗教的利他主義

本紙6ページで抄録の「共生社会と宗教」(2011年3月6日・同志社大学にて開催)では、『社会貢献する宗教』(刊・世界思想社)の編著者を中心にした研究者による対話と、「共生・地域文化大賞」(主催:浄土宗)を受賞した宗教者らの実践事例の報告を通して、市民社会の公益的な視点から、宗教の社会貢献をとらえなおすことを目的としていました。ここに、当日、取り上げられた3つの事例を紹介いたします。本来、宗教は寛容と和解の絆であったのではないかとという視点も重ねつつ、ぜひ、「信仰」と「社会」との関係について見つめる手がかりになれば、と願っております。

※写真は3月6日のチラシの素材を使わせていただきました。紹介文は編集部にて文責があります。



【社会慈業委員会ひとさじの会】
(<http://hitosaji.jp>)

《設立》2009年
《事務局》吉水 岳彦
《事務局》〒111-0022東京都台東区清川1-8-11 光照院

浄土宗の僧侶らによって設立された団体です。生活困窮者の葬送支援や浅草・山谷地域における炊きだし夜回りなどに取り組んでいます。会の名前は、「食べるのに困っている人へほんの一點(ひとさじ)の重湯(おもゆ)を差し上げるように寄り添いたい」という願いから付けられたものです。

事務局長の吉水さんは1978年生まれ。2008年には自坊の光照院に「結の墓」を建立しました。全国青少年教化協議会において電話相談員の研修を受けるかたわら、NPOもやいの生活困窮者葬送支援・お墓プロジェクトにかかわっています。



【北九州ホームレス支援機構】
(<http://www.h3.dion.ne.jp/~ettou/npo/>)

《設立》1988年(2000年に現在の名称に)
《代表》奥田 知志《常務理事》森松 長生
《事務局》〒805-0015福岡県北九州市八幡東区荒生田2-1-32シティコーポ七条1階

カトリック教会関係者による「北九州越冬実行委員会」が母体です。会ではまず、福岡日雇労働組合員の方々とともに、カトリック黒崎教会での炊出しと、おにぎり持参での野宿労働者の調査が行われました。

その後、襲撃事件等を経て、「ひとりの路上死も出さない、ひとりでも多く、一日でも早く、路上からの脱出を」と掲げ、保健や医療などの支援、相談対応等の自立支援、ボランティア養成や各種啓発などを展開。2004年には財務省により認定NPO法人となり、「ホームレスを生まない社会」の創造に取り組んでいます。



【支縁のまちネットワーク】
(<http://www.shien-no-machi.net/>)

《設立》2011年
《代表》渡辺 順一・川浪 剛、ほか(共同代表制)

2003年、教団を超えた宗教者ネットワークとして活動を展開する「野宿者問題を考える宗教者連絡会(soul in 釜ヶ崎)」が発足。その活動は本紙3〜5ページにご寄稿の渡辺順一さん(金光教羽曳野教会長)らにより、『貧魂社会ニッポンへ〜釜ヶ崎からの発信』(刊・アットワークス)にまとめられ、知られるところです。

同会には帰省仏教の僧侶も数多く参加してきました。それらの交流をベースに、研究者とのパートナーシップで、宗教者が関わる社会活動の見える化、エンパワメント、相互交流など、物質的な支援以外の「縁」結びに力点を置いています。

浮上した いいお坊さん 3ヶ条とは…

『いいお坊さん ひどいお坊さん』(ベスト新書)
読者の反応から

2011年10月、KKベストセラーズという出版社から、『いいお坊さん ひどいお坊さん』という書籍を出版させていただきました。本書は当初、「寺域論」というタイトルで、お寺の社会貢献について語ることを主軸としていました。お「寺」と地「域」に焦点をあてていこう、という具合です。

中世の日本では、駆込寺・縁切寺などが一般社会とは分離されたフリーエリアとして機能していたこと。経済社会からドロップアウトした人たちを受容する役割を、寺が果たしていたこと。駆込寺を核として発展した「寺町」には、封建社会の厳格な身分関係とは別のルールが成立していて、タックスフリーのフェアトレードが行われ、真にひらかれた自由経済が成立していたこと。そうした歴史的事実に着目しながら、いまの日本社会を暗雲のように覆うデフレ・スパイラルの閉塞状況を打開する施策が、寺を中心として出てくる可能性について考察する内容をめざしていたのです。

ところが、一般の方々のお寺についての様々な思いを収集するうち、寺域論を語る以前に、幾多の問題が山積していることに気づかされたのです。

「サリュ・スピリチュアル」を手にしている皆さんの多くは、お坊さんとの素晴らしい出会いを体験されていることと思います。ところが、世間を俯瞰してみると、そのような幸運な出会いを体験できている方は、必ずしも多数ではないようでした。

1 救済の場の悲痛な声

先祖代々世話になってきたお寺と良好な関係を保つことができている人に対して、素晴らしいお坊さんの話をいくら語っても、「そんなお坊さんどこで出会えばいいのかわからない」、「つきあうお寺を変えることなんてできない。親戚一同全員に了解してもらうために何年かかるかわからない」といった声が返ってきます。声高に寺域論を語ってみても、絵に描いた餅のように受け

取られてしまっは意味がありません。

仏教に限らず、宗教者と納得のいく出会いをされている方々は、宗教による価値観の転換が心の問題を解決に導いてくれ、心の問題に起因していた経済的な課題をも解決してくれる場合があるということを、重々ご存知なのです。まず向くべきは、逆に宗教的救済を得られていない人々なのではないか。その悲痛な声にまずじっくりと耳を傾けてみないことには、助けを本当に必要としている人に、必要なことがらを伝えることはできないのではないかと感じました。

一般読者代表ともいえる編集担当からも、「お気持ちっていくらが妥当なの?」、「こういうお坊さんには呆れる」といった一般市民の素の気持ちに伝える分析をもっと突き詰めてほしい、と求められました。そこで、本書の刊行が決まったときに元々の原稿に大きく手を入れることになりました。

2 経済と祈りの中道を

お寺を核とした地域社会の活性化については、「第三章 3・11後に変わる寺」と、應典院ほかいくつかのお寺の震災後の取り組みについて取材した部分を残して、大きく削りました。中世日本で、寺を中心とする町がいかに活力ある経済社会を形成していたかといった話も、ばっさりと削りました。

それよりも、幾多のお坊さんについての事例から、「いいお坊さん」と「ひどいお坊さん」の狭間にある「中道」を見出していくことに紙幅を割きました。

勘違いされることが極めて多いと思うのですが、中道とは、「平均値」でもなければ、両極端を排除した「ほどほど」でもありません。数値や情報から離れ、心の量を推し量りながら、お坊さんの真価とは何であるのかを、時々刻々絶え間なく「探ろう」とすること。何が良い、何が悪いと「決めつける」ことをせずに、揺らぐあまたの事象のなかから、いま現在の「真実」をつかみとろうとする努

力からのみ、中道は見出されると思います。

ですから私は、何がいいお坊さんであり、何がひどいお坊さんであるかを、明確には書きませんでした。

「いいお坊さんにも高みから見下ろしてしまうという落とし穴がある」「ひどいお坊さんと思われる人が、借財を負い、伝統ある寺を支えきれなかった重責を負ってはじめて、生活困窮の重荷とはこういうことかどハッと気づき、真の救済に結びついていく可能性がある」など、さまざまな方向から意見を投げかけ、「いいお坊さんとは何か」について、ひとりでも多くのかたに立ち止まって考えていただくきっかけとしたかったのです。

3 納得のいく出会いへ

発売後、「この著者は何を言いたかったのかわからない」という声が半数くらい返ってくるのではと懸念していました。勝負負けが重視される時代。実用書ばかりが飛ぶように売れる時代。「ひどいお坊さんとは何か」が赤裸々に書かれていない本など、誰も喜ばないのではないかと感じていました。

ところが、「結論が曖昧だ」といった声は、出版2ヵ月間にいただいた60件以上のコメントのうちわずか1件。このありがたい結果には、私自身相当に驚きました。

葬祭業者のかたがたと話していると、「葬式に坊さんは要らないという声が高まっている」とさえ聞く昨今なのですが、じっさいのところ、世間の人々は「できることなら納得のいくお坊さんと出会いたい」といかに強く切望しているかということが、この結果からは如実に伝わってくる気がしています。

読者のかたからの反応を得たいま、世間の人が望む「いいお坊さん像」について、私なりの解答が見えてきました。つまり、いいお坊さん3ヶ条とは、①来るものを拒まず、②去るものを追わず、③否定語を用いない。この3つに集約されるということです。

4 「困ったらお寺に」と…

①は、世間の人々の多くが、「仏教は争いになじまない平和主義的な思想である」と考えているため、僧侶が他者を批判することを好まない、という意味あいです。

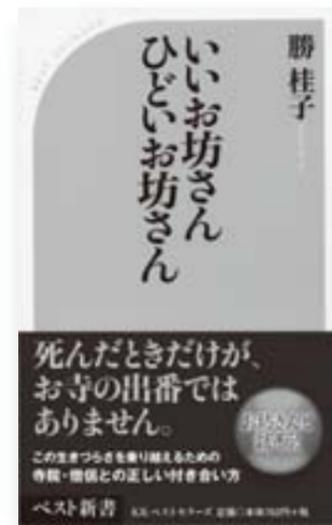
②については、カルト教団がなぜ危険と言われるのかをご想像いただければ伝わると思います。

③は、選択自由でボーダーレスな時代の副作用として、一人ひとりの立ち位置や評価が曖昧になっているがゆえに、自己肯定感を持ってない人が増えているためです。「お前はダメだ」と言われて人がハッと前向きになれるのは、ある集団や層の中で、自分だけが怠けている、もっと頑張らねばと気づく場合ではないでしょうか。層の境界が曖昧な中で厳しくされても、なぜ自分だけが厳しく言われるのかと、人は凹むばかりなのです。

無闇にほめよということではありません。たとえば相談者の言葉に違和感をおぼえたときに、「それは違います」と否定する前に、「なぜそのほうがいいと考えたのですか?」など、相手の真意をひきだす質問をしながら、少しでも接点を探る方向で傾聴し、対話をしていくことが、仏教者には求められているのではないかと思います。

この3ヶ条にあてはまるお坊さんが今よりもっと増え、「医者や教師は上からモノを言うけれど、お坊さんは違う。困ったらお寺に行ってみよう」という観念がスタンダードになる日がきたら、いよいよ寺域について語れるようになるのではないかと感じています。

勝 桂子(かつ・けいこ)
1988年国際基督教大学卒。フリーの雑誌記者を経て子育てに入り、文章指導業のかたわらで2007年に行政書士資格取得。行政書士となつての初めての相談が「墓地に関するトラブル」だったことがきっかけで、改葬、遺言、相続、成年後見、墓地許可相談などの業務に重点を置く。生きづらさや死生と向き合う交流サイト<ひとなみ>(http://hitonami.net)の管理人を担う。



勝桂子・著
『いいお坊さん ひどいお坊さん』
ベスト新書「KKベストセラーズ」刊

WORKS

秋田 光彦

2011年1月から7月まで、大蓮寺と應典院で起きた様々な動きを、レポートします。

法輪は



年末年始の風景を共に過ごす。 「年越いのちの村」で、新年を迎える。

2010年の大晦日から、11年元旦にかけて、應典院と大蓮寺両寺を開放して、「年越いのちの村」を1泊2日で実施しました。自死対策に取り組む市民団体(Live on:リヴオン)とお寺が協働して共催したものです。

これは、年末年始、人間関係に苦しみ、帰る場所もなく、孤独感を抱えがちな人たちが身を寄せて、「生き続ける」場。新聞報道もあって、全国から多様な人々20数名が集まりました。年越しそば、除夜の鐘、修正

会、お雑煮、福笑いや書き初めなど、年末年始の風物をみなで共体験しているうちに、関係はうち解け、最後の分かち合いでは「しんどい思いをしてきたが、ここに来てよかった」と涙ぐむ人も。

「人と人とが横につながって、そのぬくもりを分かち合い、もう1年生きてみようかと思ってくれたらうれしいです」と尾角さんは語っていました。お寺の合宿は受け入れが大変でしたが、意義深い場となりました。



12月31日
～1月1日

一年の終わりと始まりを共に迎えた「年越いのちの村」(1月1日、修正会の勤行)

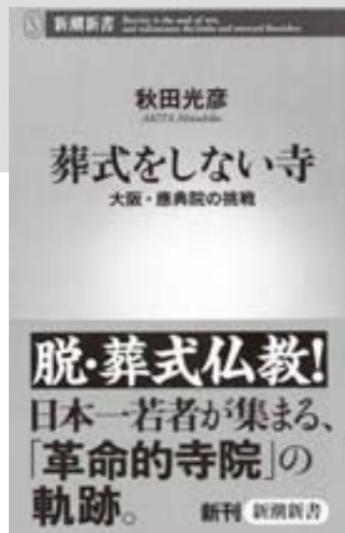
革命的寺院の軌跡。 秋田光彦住職、渾身の1冊。

私の初めての単著「葬式をしない寺—大阪・應典院の挑戦」が新潮新書の1冊として出版、97年の再建までの前史から、今日までの14年間を、一人称で綴っています。

出発点となった阪神淡路大震災やオウム真理教事件、NPOやアート、生きづらさを抱える若者たち、葬式仏教のリストラとエンディングサポート、さらに終章では社会参加仏教やお寺の未来に言及しています。

型破りなお寺の記録ですが、「(應典院は)一般的な寺院のイメージを逸脱して

いるのかもしれませんが、違いやずれが引き立たないところに多様性の活力は担保されないし、お寺の創造力も発揮されない」と、「あとがき」でも述べました。



『葬式をしない寺—大阪・應典院の挑戦』
700円+税
新潮新書(新潮社)

2月17日

悲しみを忘れない。ただここから祈る。 311本の灯を捧げて、祈りの市民集会。

3月11日、歴史的な災厄が日本を襲いました。地震、津波、そして最悪の原発事故…経済合理主義によって追求されてきた利便性とは、一体何だったのか。幸福や安心ということばがこれほど問われたことはありませんでした。

應典院では、4月10日に「祈りの市民集会～Pray from West」を開催、震災から1ヶ月のこの日、さまざまな場が創り出されました。

発災直後に被災地に入った写真家による現地のスライド上映、仙台で支援活動に取り組む真宗僧侶・川浪剛さんと、

研究者・関嘉寛さんの対談による報告、また詩人・上田假奈代さんによる手紙と詩の朗読、そして集会の呼びかけ人を代表して私から趣旨を述べて、地震発生時刻に前後して、311本のろうそくによる献灯と、参加者の皆さんによる献花となりました。その後もNPOやアートによる、さまざまな「祈りの場」が捧げられました。



4月10日

東日本大震災・祈りの市民集会「Pray from West」(4月10日14時46分の献花・献灯)

遺族とグリーンワーク。 エンディングセミナー、2011開催。

大蓮寺・應典院共催による夏のエンディングセミナーが、今年も「遺族とグリーンワーク」をテーマに開催、お盆前に3つの講座を実施しました。

セミナーは7月16日に「若者発:グリーンコミュニティのすすめ」と題してNPO Live on(リヴオン)代表の尾角光美さんが、同23日は「仏教とスピリチュアルケアをつなぐもの」と題して飛騨千光寺・大下大圓さんが、同30日は「グリーンワークと

しての葬送を考える」と題して第一生命保険研究所主任研究員の小谷みどりさんが、それぞれ講演と、私とのトークで進めました。少子高齢化、無縁化により、死生観も大きく変容する現代、グリーン(悲嘆)ケアへの新たなアプローチを学びました。関心は高く、毎回盛況でのべ130名を越える方の参加がありました。

また毎回、震災の話題にも至りましたが、被災地における弔いや供養などを通

「無常」からの出発。 震災から問われる仏教とは…。

7月2日には第61回寺子屋トーク相愛大学新学科開設記念企画「震災と仏教～私たちは今、何を問われているのか」を開催しました。宗教学者の釈徹宗さんと評論家の宮崎哲弥さんの対談とあって、本堂は満杯に。当日は、相愛大学仏教文化学科、文化交流学科から10名の学生がボランティアとして、会場運営等のサポートに参加しました。

お二人のトークでは、「震災の不安に浮き足立つ人々に対して、日本仏教は何かメッセージを出せたのか」という問いから始まり、この未曾有の災厄に対し、日本仏教が示すべき立ち位置を、時にユーモアを交えながら明快に語りあげました。テレビで人気の宮崎さんですが、この日は釈さんとともに現代の仏教者として叡智を注いだ対話が、聴衆を魅了しました。

7月2日

寺子屋トーク「震災と仏教」会場風景



して、グリーンワークとしての葬式仏教について言及があったことは大きな特徴でした。

「喪の文化」の再生。 悲しみの只中に生きる私たちにとって、 時代を超えた共生のために必要なこと…

■震災から学ぶ戒と律

3・11。私たちは2011年の東日本大震災により、1:17:9:11に並ぶ特別な意味を持つ3桁の数字を得ました。国内観測史上最大規模という東北地方太平洋沖地震に、とりわけ関西で暮らす人々にとっては、16年前の「あの日」を想い起こした人も多かったのではないのでしょうか。

今回の東日本大震災は、大規模・広域複合型の災害でした。何より、東北電力館内に設置された東京電力福島第一原子力発電所の事故で、首都、東京の機能をも揺るがしました。やもするに、阪神・淡路大震災は関西の出来事として捉えられていなかったが、今回の報道等にはそんな見方さえ重なります。無論、1995年は震災後にオウム真理教事件が起こったのも無関係ではないでしょう。例年、年末に発表される、今年の漢字にも、阪神・淡路大震災と東日本大震災とのあいだの捉えられ方の違いを見ることが

できる気がします。世の中を震撼させた事件が相次いだ95年は「震」とされました。方で2011年は「絆」。その前年に「無縁社会」と言われたことも無関係ではないでしょう。

ただ、この二つの漢字を比較してみると、「震はあの日を忘れてはならない」という戒め、「絆があの日を起点に自らを律して」という誓い、そんな違いを見いだすことができます。さらに、この両者には「戒律の対比が見られる」と言えないでしょうか。要は「阪神・淡路大震災では『してはならない』という戒を、そして東日本大震災は『していい』という律を得た」という具合です。

■葬式をしない寺で思う葬送

2月に刊行された秋田光彦・大蓮寺住職の著書が、葬式をしない寺であるように、浄土宗・應徳院は、檀家がおらず、葬式を出さず、お墓がありません。1997年の再建以後は、「こころの文化創造のため、多彩な事業

を展開しています。東日本大震災を経験した今夏のエンディングセミナーでは、遺族とグリーフケアという統一テーマを掲げました。7月30日、第1生命経済研究所の小谷みどり主任研究員も震災の話題に触れつつ、死を悼む文化が希薄になってきたのは、死の直前に資金を費やす機会が増え、納得できる死を迎える人々が増えたからと指摘しました。

東日本大震災から半年、毎日新聞社「エゴノミスト」誌の9月20日号では「葬式と墓が特集されました。その巻頭では前掲の小谷さんが、今次の大震災が「亡くなった人を悼み弔う葬式の意味を見つめ直すきっかけになったのではない」という問題提起をされています。

「最早葬式仏教」と言われて久しい中、改めて形式としての場が設けられることと価値ではなく、儀式として催されることの機会の意味が問い直されてきたと言えるでしょう。今後、経済的な合理性ばかりが追究され商品化されてきた葬送儀礼が、再び習俗として営まれる喪の文化として扱わ

サリュ・スピリチュアルvol.4
2011年12月26日発行

編集長：秋田 光彦
編集：山口 洋典・池野 亮光
写真：山口 洋典

発行：大蓮寺・應徳院
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
(〒543-0076)
電話06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
Email info@outenin.com
URL http://www.outenin.com



れていく契機になるかもしれません。生命の終わりを迎えても、その人の存在(いのち)に終わりはないという教えです。今未曾有の災害で生命を落とされた方々の(いのち)を、遺された人々が受けとめる上で、今、「葬式と墓」が問い直されているのではないのでしょうか。ちょうど式の後や墓前であなたの方まで生き抜く「あなたに恥ずかしくない生き方を」と、自ら誓いを立てることが多いこともそのあらわれでしょう。

本号の3ページに用いた写真は、先般、学校法人立命館災害復興支援室の仕事で岩手県大槌町に伺った際に撮影したものです。仮の町役場の向かいに建てられた仮設の仏具店。香を焚き、蝋燭を灯す、それらを求める人がいるということです。悲しみの只中で、他者の死を悼み、自らの生に感謝する、そのために仏教に通底する物語が救いとなれば、と願っております。

(山口洋典)

※本稿の一部は2011年9月30日付の奈良日日新聞に寄稿した内容に大幅な加筆をしたものです。

▼オウム事件に刑事裁判が16年を経て結審。ある死刑囚は自らの手記にこう述べた。「宗教は人の心に平安をもたらし、人と人をつなげ、平和な社会を築く肯定的な作用があるが、その反面、自らの正しさを強調するあまり、独善的・排他的になったりもする」。事実、オウム事件は、宗教界に大きな打撃を与えた。私には、若い優秀な人材が何故、と訝しく思えたが、親しい友人に「それは、あんたら(坊さん)がぼやぼやしているから」と一喝されて目が覚めた。あれを淫祀邪教というのはたやすいが、世界を震撼させた宗教団体の悪行に、既成教団は無関心・無関心の態度を貫いた。絶望した私は、NGOの世界に入ったが、ここでも「なぜ日本の仏教は社会の対立や矛盾に沈黙しているのですか」と問い詰められた。

▼誤解を恐れずに言うと、NGOの若者もオウムの若者も共通して、現世のあり方や自分の生き方に苦悩し、居場所を求めていた。オウムは現世を否定して、悪魔的な求道に入るが、NGOの若者は批判しつつ、外へと参加していく求道であった。オウムは内に籠るほど、自己の思考が枯渇し、やがて教祖によって洗脳されていく。逆にNPOは外に開き、苦悩しながらも、他者への想像力を欠かなかった。主体を失わなかった。そこが大きな差異だったと思う。

▼昨年、「宗教と社会」学会が行った大学生の宗教意識調査によると、非宗教系大学に通う学生2003人中、「信仰がある」が7.5%、「宗教に関心がある」は46.4%と、合わせて半数を超えた。また21.6%が「宗教は人間に必要な」と答えた。宗教への警戒心は薄らいできたのか。今後は震災の影響も大きくなり、宗教には、新たな動脈が見えてきたのかもしれない。ただ、人々の不安や孤立感が増幅すると、再びオウムは起きることを忘れてはならない。つながりや思いやりが失われ、規範や倫理が後退していくと、人々はまたカルトを求めないとは限らない。思考停止に陥り、易々と教祖の言説に呪縛されていく。

▼應徳院はオウムを契機として生まれた。演劇もアートも、表現は自分の身体を抛り所に、外へとつながる創造の回路である。上手下手は関係ない。それさえあれば、思考と想像力を失わない。当の宗教とは、教祖や教団が与えるものではなく、あなた自身が選び取る自覚的な生き方なのだ、と思う。(MA)